

は、學界にとつて幸慶と謂ふべきである。

本書は、原始篇と土俗篇の二冊よりなり、其の前冊では、主として縄文土器の施文から看取される纖維工藝を論じ、後冊では、現代日本の民藝品や日本周邊の未開民族の土俗品に就いて、其等に見る編物、織物を通じて、日本石器時代の纖維工藝を説明する傍證としよつてゐる。即ち前者では、日本石器時代土器（縄文土器）の地方相を述べた後、複雑極らない縄文の施文法を詳細に考査し、兼ねて貝文、櫛目文、押型文にまで論及してをり、また我が石器時代の特殊遺物たる陸奥是川泥炭遺跡出土の有機質遺物の一般的性質と其の化學的分析の結果を叙述し、なほ石器時代の工具に關しても、工藝的見地より示唆に富んだ記述を試みてゐる。後者では、アイヌを中心として北方及び南方の未開民族の土俗品及び日本の民藝品に於ける編物、織物の纖維組織を吟味した後、服装、被り物、履物類に現れた纖維工藝と其の材料に關する委細な記載を以つてしてゐる。

本書によつて從來閑却されてゐた著者の所謂日本石器時代の『軟質文化』なるものは、其の内容に明確の度を加へられ、また錯綜せる縄文の構成及び施文法に對する杉山氏の解釋が明にせられた。そして此れを通じて著者が、當代人の衣服は、獸皮や樹皮をそのまゝ、纏つた原始的なものでなく、裝飾的に高度に發達してゐる編物類から考へても、織物として相當進歩してゐたとする推論を下されてゐるのは、注目すべきである。

たゞ本書を通讀して感ぜられるのは、原始篇と土俗篇が一個の

『原始工藝史』としてなほ統一を缺くの憾みのあることである。土俗篇を以つて、原始篇の内容を傍證し、補填せんとする著者の意圖は、本書に於いて實際の上ではなほ別個の著作の如き觀を免れてゐない。更に本書が『工藝史』である以上、ひとり縄文土器の地方相ばかりでなく、時代相に關する考慮も望ましかつた。現今に於ける我が遠古の文化の研究には、其の方法や態度に就いて、多くの議すべき箇處のあることは、事實であるが、著者の前著『日本原始工藝』の公刊後十數年間に於ける進歩は、何人も否み得ない所であつて見れば、右の新知見を盛つて所謂『日本原始纖維工藝』を歴史的に把握されたならばとの蜀望の感なきを得ないのである。併し、多年此の方面の調査・考察に企し、其の分野にかうした業績を示されて行く著者の精進が、學界の進運に資するものゝあることは、言を俟たないのである。

（規格外、舊四六倍版、二冊。本文、三二四頁、圖版、一九九葉。雄山閣、發行。定價、貳拾圓。）
角田文衛

遠 賀 川

——筑前立屋敷遺跡調査報告—— 杉原 莊 介著

遠賀川なる名は彌生式土器の古式のものに對する名稱として、其文化研究者に親しいものであり、此大陸に近かい炭鑛地帯たる遠賀川流域の低地帯は、畿内のそれと並んで日本に於ける彌生式文化育成地域の一をなしてゐる。所がかゝる重要地域なるにも不拘、從來本流域の遺跡としては上流飯塚市の立岩或は此書の主體

をなす水巻町大字伊佐屋或は立屋敷其他の出土品が個々に取り上げられたに過ぎない。こゝに於て杉原莊介氏及び東京考古學會の同人はこの缺を補ふべく、昭和十五年八月十一日より約一週間、立屋敷遺跡に就いての發掘調査を行ふたのであつて、本書はその結果の報告である。A四判、本文五〇頁、圖版三六葉より成るこの書は、先づ遺跡の狀況、遺物の解説、分類なる一般報告書の型に依る記述の他に、別に第五章に文化なる項目を設け、立屋敷出土の遺物群、殊に土器のもつ型式、形態、様相を概観した上、第六章を結語として、此等第五章以下を考察編となし、それらに三分の一以上を費す所に一つの特色があり、この點からすると、寧ろ論説たるの趣を示してゐる。この報告書としてやゝ異様な體裁は、蓋し發掘に依つて並・質共に目星しきものを見出さなかつた事と、著者がこの機會に彌生式土器文化觀を闡陳せんとする意圖の見られる事であらう。著者の意見を要約すると發見の彌生式土器に三型式の存する事、その初期の立屋敷層で標識される古式のものから、伊佐屋層をへて末期水巻町層に到るまで、夫々區別の存する事、それらは層序の上からも明かで、一方この經過の間には時の斷絶が考へられるのである。即ちこの層序的の隔間はそれ等三つの遺跡層より復元される聚落が直接に繼承されたものでないことを示し、その間に時間的空隙を認めざるを得ず、延いて三つの聚落は夫々自身の文化期に於いて、一應の終末を遂げてゐることとなるといふのである。たゞ遺跡自體の記述に依ると同地は散布地たるの性格を示し、遠賀川の洪水氾濫が充分豫想

せられるのであり、殊に第一類土器を出す筈の立屋敷層では發掘地域に於いては遂に遺物を出土せず、他のものとの對比から單に推定したに過ぎず、第二第三の兩層序の關係に到つても、之を立證すべきより客觀的な記述を缺いてゐる。然るにかゝる薄弱な基礎の上に、第五、第六章で論じられた様な大きな彌生式文化論を展開させたのである以上、初に見た意味での重要な調査報告書たるの感が少く、寧ろ遠賀川の調査を借りて杉原氏一個の意見を自由に書き立てた感が深い。これは出土品が僅少で遺跡自體に書き立てるべき箇處が少なかつたといふ事の故に是認せらるべきではない。又本文中發掘に依つて檢出せられた個々のものに對する正しい記述がなく、從來出土の土器と一括して述べられて居り、而もそれにあつても圖版参照番號すら附されてゐない等は正確なる可き筈の遺跡の調査報告としての何よりも大きい缺陷である。なほこの彌生式文化觀なるものもわざわざ著者に依らねばならぬが如き新鮮味を缺くものなるに於いて、その序言に於ける著者の抱負と遠いことをも感ぜざるを得ないものがある。(葦牙書房發行、定價拾五圓)(藤岡謙二郎)

羊頭窪

——東方考古學叢刊、乙種第三冊——水野清一等著

一昨年秋のことである。當城子四平山石塚の調査が行はれて、此處から豊富なる黒陶を發見し、河南安陽・山東城子崖などの史前文化の一系列が、はるかに海を越えて關東州にも及んでゐた